第3章

荒尾空襲を体験した少年の記憶

まさかこんな田舎が空襲にあうなんて―

▲谷口さんが使っていた準教科書

▲小学６年生のときの谷口さんの通知表

▲谷口さんの姉が着けていた手作りの校章

※右の品は空襲を免れ、今でも大切に谷口さんが保管しています。

荒尾空襲

「夏が来るたびに、空襲で集落が焼けた日のことを思い出します」。

昭和20（１９４５）年の初夏、旧制玉名中学校１年生だった谷口良一（たにぐちりょういち）さんが住む向一部の集落に焼夷弾が落とされました。就寝中の谷口さんが目を覚ますと、既に家の外の納屋には火柱が上がっていました。

「火の回りが早く、家族全員、気が動転してしまい、蚊帳（蚊などから身を守るための網）の中を出たり入ったりしていました。防空壕に避難する暇なんてありませんでした。無我夢中だったので、どうやって家の外へ逃げ出したか覚えていません。けれども、なんとか家族は全員無事でした」。

この日、同じ集落の家など10ほどの家屋が焼けましたが、幸い住民は無事でした。「翌朝、近所の畑に不発弾が落ちているのを見て、ぞっとしました。いつも大牟田のまちが空襲で焼かれているのを家から見ていましたが、まさかこんな田舎が空襲にあうなんて、思いもしませんでした。もしかすると、近くにあった二造の施設と間違えたのかもしれないですね」。

INTERVIEW

谷口良一（たにぐちりょういち）さん（向一部）

昭和７年生まれ。旧制玉名中学１年生のときに、家の納屋が空襲で焼かれる。戦後は教員となり、戦後生まれの子どもたちの教育に情熱を注いだ。現在は市の文化財保護委員会会長を務める。

戦争を振り返る

その後、集落では空襲もなく、静かに終戦の日を迎えます。「何もかもが戦争一色の時代。男子は皆、将来は兵隊さんになると言っていました。私も子どもながらに勤労奉仕などで戦争に協力していました。今思うと茶番ですが、当時は本土に敵が上陸したら、竹やりで戦おうと大真面目に訓練していたんです。どんなに日本の形勢が傾いていても、神風が吹いて、必ず日本が勝つとみんな信じていました。なので、敗戦には戸惑いました。けれど、これでまた学校で勉強ができると安堵しました」。

未来を担う若い人へのメッセージ

「戦争を繰り返さないよう、若い人にはしっかりと勉強して、良いことと悪いことをきちんと判別できるようになってほしいですね。自分のことだけでなく、周りの人のことも考えられる人になってほしいです。そうなれば、争いは避けられます。たくさんの人と協力し合って、よりよい未来を築いてください」。

▲雛菊：花言葉「平和」

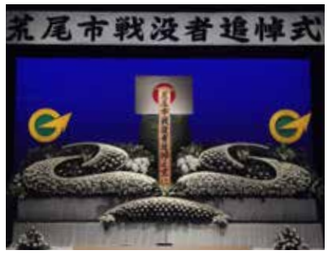
第４章

父を亡くした遺児の記憶

戦時中も戦後も悲惨だった

▲崎坂さんの父・藤市さん

▲四山にある慰霊塔



▲毎年 10 月に行われる市の戦没者追悼式

戦後の生活

崎坂純昭（さきざかよしあき）さんは戦争で父親を亡くした遺児です。「3歳くらいのときに父が戦争に行きました。幼かったため、一度だけ抱っこされたのが唯一の父との思い出です」父・藤市（とういち）さんは昭和19（１９４４）年に戦死。一家の大黒柱を失い、母・静子（しずこ）さんはがむしゃらに働きました。終戦の年に小学校へ入学した崎坂さんも、精一杯母を助けました。

「遊びたい盛りの年頃でしたが、生活していくためには仕方ありませんでした。母と貝を採りに行き、露店で売るなどしていました。子どもながらにつらかったです。片親だという理由で心ない言葉をかけられたこともありました。父が生きていてくれたらと何度も思いました」。

懸命に平和な時代を歩み始めた崎坂さんに戦争の残り火が降りかかる出来事が起こります。「ある日、海岸で不発弾と知らずに、触って遊んでいた友達が爆発に巻き込まれて、亡くなりました。戦後もまちには不発弾が残っていたのです。私もその場にいたので、もう少し近くにいたら、命を落としていたかもしれません。戦争は終わったのに、あんなことになるなんて。戦時中も戦後も悲惨でした」。

受け継いでいきたい平和への思い

２年前、有明小学校の子どもたちに戦後の暮らしなどを話したのを機に、ある思いが強くなったと崎坂さんは言います。「戦争のことを思い出すとつらいので、あまり話したくはなかったのですが、若い人たちに戦争のことをもっと知ってもらいたいと思うようになりました。私自身も先に進まなくてはならないと考えるようになったんです。二度と悲劇を繰り返さないためにも、若い人たちにもしっかり前を向いて、未来に進んでほしいですね」。

現在、崎坂さんは荒尾市遺族連合会会長として、慰霊塔の清掃活動、戦没者追悼式への参加や遺族同士の交流会などを行う世話役をしています。「会員の高齢化が進み、会の運営がだいぶ厳しくなってきました。昨年、『孫・ひ孫の会』を発足しました。戦争で亡くなった人の孫やひ孫にあたる人のための会です。たくさんの若い人に加入してもらい、平和への思いを次の世代へ受け継いでいけたらと思います」。

INTERVIEW

崎坂純昭（さきざかよしあき）さん（北増永）

昭和 13 年生まれ。5 歳のとき戦争で父を亡くす。戦後は母の手伝いをしながら学校へ行き、教職に就く。現在は市の遺族連合会会長として、遺族の心に寄り添うため、慰霊活動などを行う。

▲平和の象徴：ハト